

「ことば」シリーズ 10

日本語の特色

文化庁

「ことば」シリーズ10
日 本 語 の 特 色

昭和54年4月10日 発行 定 価 250円

編 集 文 化 庁

発 行 大 蔵 省 印 刷 局

東京都港区虎ノ門二丁目2番4号
(03)(582)4411

落丁，乱丁はおとりかえます。

前 書 き

文化庁では、昭和四十七年六月の国語審議会からの建議「国語の教育の振興について」に示されている「国語が平明で、的確で、美しく、豊かであることを望み、この際、国民全体が国語に対する意識を高め、国語を大切にすることを養うことが極めて重要である」という趣旨に基づき、昭和四十八年度から「ことば」シリーズを作成し、これを各学校、各社会教育機関等に広く配布することになっています。

このシリーズでは、話し言葉、書き言葉を問わず、国民各層から広く関心の持たれている言葉に関する問題を取り上げ、その内容や言語生活における在り方について、専門家や学識経験者等により、分かりやすく解説などを加えていこうとするものであります。

本年度は「ことば」シリーズ10として、「日本語の特色」を作成しました。この本では、我々が日常使用している日本語について、いろいろな角度から、その特色を取り上げてみました。企画委員会で構想を練り、内容や執筆分担について相談してまとめたもので、次の二つの部分から成り立っています。

一 総論を兼ねた、日本語の特色をめぐる座談会

二 問題になる点に関する解説五編

この「ことば」シリーズは、国民の言語生活について、あるべき標準を示そうとするものではなく、我々が我々自身の言葉について考えたり、話し合ったりするきっかけとなり、参考となることをねらいとしているものであります。そうして、そのことを通じて、広く国民の間に国語に対する認識が深まり、国語を大切にすることが高まってくることに役立つかこととなれば、誠に幸いと存じます。

昭和五十四年三月

企画、執筆等に御協力くださった方々

(五十音順、敬称略)

氏名	現職
阪倉篤義	京都大学教授
滋野雅民	筑波大学附属中学校教諭
鈴木孝夫	慶応義塾大学言語文化研究所教授
野元菊雄	国立国語研究所日本語教育センター長
林大	国立国語研究所長
林巨樹	青山学院大学教授
林四郎	筑波大学教授
水谷修	国立国語研究所日本語教育センター日本語教育研修室長
南不二男	国立国語研究所言語体系研究部長
村崎恭子	東京外国語大学附属日本語学校助教授
ドメニコ・ラガナ	法政大学客員教授

目次

前書き

座談会

日本語の特色をめぐって……………

林 四郎(司会)

鈴木孝夫 林 大

村崎恭子 ドメニコ・ラガナ

5

解 説

一 日本語はどんな言葉か(南 不二男)……………

第一 地域・話し手・名称

第二 系統・歴史・方言

第三 日本語の構造

第四 日本人の言語生活

34

二 日本語の構造上の特色(阪倉 篤義)……………

第一 日本語の「むつかしさ」

第二 「すきま」の多い構造

第三 「係り」と「結び」

46

三 日本語の話しことばと書きことば (野元 菊雄) 61

第一 話しことばと書きことば

第二 話しことばと書きことばとのレインジ

第三 日本語での差

第四 文の長さについて

第五 文の構造

第六 語彙の違い

第七 表現意図

四 日本語の表記法 (林 巨樹) 75

第一 漢字かな混じり文

第二 日本語の文字

第三 表記上の諸問題

五 外国語としての日本語 (水谷 修) 86

第一 外国人にとって日本語はむずかしいか

第二 音声

第三 表記

第四 語彙

第五 文法・構文

第六 談話



座 談 会

日本語の特色をめぐって

<出席者>

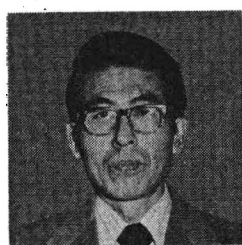
鈴	木	孝	夫	
林			大	
林		四	郎	(司会)
村	崎	恭	子	
ド	メ	ニ	コ	・ラガナ

(五十音順)

林(四) きょうのテーマは「日本語の特色」ということですが、これは、日本語を外国人に教える場合とか、世界の中心の日本語の特色とかという国際的な視野で考えるべきだろうと思うんです。そこで今日は外国の方、それに外国人に日本語を教えていらっしゃる方にもおいでいただいて、いわゆる国語学とは違った広い視野から日本語というものを見ていただきたいと思っております。

まず話のきっかけとして、日本語というのは一体易しい言葉なのか、難しい言葉なのかということを考えてみたいと思うんです。

昔は日本語ほど難しい言葉はないとしゃちゅう聞かされていたんですけれども、このごろは非常に日本語の上手な外国人が増えてきて、日本語は決して難しくないんだというふうに変わってきたような気がするんです。ただし、それは一口には言えない。日本語と



林 四郎氏

林 四郎氏 いても、話す日本語、聞く日本語、それに読み書きもあるわけで、それぞれ違うという感じがするわけです。

そこでお手元にお配りしたものの(7ページの表参照)に入門的な意味で、よく入りやすく達しがたいという言葉がありますが、入りやすいか、入りがたいか、達ししやすいか、達しがたいか、聞く、話す、読む、書くについて、評価を○×で記入していただくと、どんなふうになるだろうか。これが果たして皆さん方が一致するものだろうか。ついでに英語というものを考えたらどうなのだろうかということで、併せて書いていただきたいのですが。

鈴木 日本語が入りやすいとか達しがたいというのは、日本人の立場からですか、それとも外人がということですか。

林(四) 外人がです。いまや日本語とは外国人にとって入りやすい言葉と言うべきか、ということです。

村崎 英語の方は、自分の経験ですか、一般的に普遍的にですか。

林(四) 自分を軸にして、自分で考えると、英語とはどうもこういう言語なのだろうというふうに、なるべく一般化して……。ラガナさんの場合には、外国人として日本語を見るわけですから、御自分の感じを書いてください。

ラガナ 私の体験に基づいてですか。

鈴木 こういふのはヒステリックに発作的に書くと、真実が出ることもある。(笑)



鈴木 孝夫氏

文字の読み書きの方では難しい言語ではないか、そういうお答えじゃないかと思えます。殊に話すことは皆さんが○を付けておられ、入りやすく、達しやすいいとお考えになっている。(注 集計の結果は右の表のと

林(四) それでは集計します。皆さんの印象での日本語は、聞く・話す方は割と○が多く、読む・書く方は×が多い。だから話す・聞く音の方では比較的易しい言語だが、

日本語の場合

		入り				達し			
		鈴	林	村	ラ	鈴	林	村	ラ
		木	(大)	崎	ガナ	木	(大)	崎	ガナ
聞	く	○	×	×	○	○	×	○	○
話	す	○	○	○	○	○	○	○	×
読	む	×	×	×	○	×	×	×	○
書	く	○	×	×	○	×	×	×	○

英語の場合

		入り				達し			
		鈴	林	村	ラ	鈴	林	村	ラ
		木	(大)	崎	ガナ	木	(大)	崎	ガナ
聞	く	○	×	×	○	×	×	×	○
話	す	○	○	○	○	○	×	×	○
読	む	○	○	○	○	○	○	○	○
書	く	○	○	○	○	×	×	×	○

おりであった。

ところでラガナさんは○が多いですよ。

ラガナさんの日本語習得法

ラガナ 実は私はそういうような問いに対して疑問を抱いているけれども。(笑)

日本語は、話すことも易しいし、書くことも易しい。でも問題は、どんなものを書くのか、どういうふうに書くのか、どういうふうに話すのか、という事です。私の場合には、読むことは易しかったし、書くことも易しかったんですが、私の日本語はまだ、ものになっていません。

林(四) ラガナさんはいつごろから日本語に接触を始めたんですか。

ラガナ はっきり覚えていませんが、日本語の勉強を始めたとき三十五歳を過ぎていました。今から二十年前のことになりますけれども、毎日毎日勉強してきたというわけではありません。いろいろな空白がありましたし、ときどき思い出したように勉強してきたので、具体的には何年になるのか、よく分かりません。

林(四) ラガナさんの場合は、書くことをどんどんなさったんでしょう。

ラガナ 私は初めから日本人との個人的な会話よりも、大勢の日本人を相手とする文章に興味がありましたので、



大氏 林

会話を無視して、書くことに専念していたわけです。これはほかの外国語に当てはまるかどうか分かりませんが、私の体験では、日本語を覚えるために一番いい方法は、文章の訓練を重ねること、日本語を書けるようになりさえすれば、話せるようになる。逆はちょっと難しいと思います。

しかし、こんなことを言うのと誤解されるかもしれません。書くことは具体的にはどういうことなのか、それに就いて私の考え方を述べたいと思います。

書くことは、母国語を書くのと全く同じスピードで書くことです。もちろん、辞書と首っ引きで書くのは、書くことじゃなくて、翻訳だと思えます。もし母国語でも書いているように外国語を書けるとすれば、話せるはずだというのが私の考え方です。実際私が初めて日本へ来たとき、私のアクセントやイントネーションは、今の私のアクセント、イントネーションよりもずっと悪かったんですが、話すことはもちろんできました。

私はこう考えていたんです。日本にはいろんな方言がある。もし私がイントネーションやアクセントなどを無視して、できるだけ正確にイタリア語風か、スペイン語風に母音

や子音を発音すれば、日本に行った場合には、ラガナ弁というものをしゃべることになりますね。(笑) 鹿児島弁もありますし、東北弁もありますから、ラガナ弁というやつをつくってもいいんじゃないかと思いました。私は別にアウンサーにならなくてもありませんし、相手に通じさえすればいいんじゃないかと思っています。

林(四) 話す場合はおっしゃるとおり、それで通用する。しかし、書く方はどうされたんですか。

ラガナ 私は独学で勉強していたので、具体的にはどういうような日本語を書いていたのか、よく分かりませんが、れど、母国語を書くのと全く同じスピードで書けるようになったということは、事実です。いい日本語かどうか、それは別問題ですが。私が書いていたのは論文じゃなくて、小説みたいなものでした。いや、身辺雑記でした。身辺雑記とか少説みたいなものには、地の文もあれば、会話文もあります。地の文も会話文も書けるとすれば、もちろんしゃべることもできるわけです。

実際問題としては、私が日本へ来たときにはかなり早くしゃべることもできました。日本へ来て二週間しないうちに、ある大学で講演をしたのです。その際、次のように前置きました。「私は書くことはどうにかこうにかできるようになりましたが、しゃべることは会話の練習をしたことが

ありませんから苦手です。」と。講演が終わって、ある学生から「よく話せないとおっしゃったけれども、二時間ぐらいしゃべってこられたじゃありませんか。」という質問がありました。そこで、私はこんなことを言った。「私はしゃべっていたのではありません。皆さんの存在を否定して、まるで自分の書齋にでもいるかのように書いていたわけですから……。」(笑)

林(四) つまり、口で書いている。

ラガナ ただ、こういうことは言えますね。書くときは訂正することもできますし、後で手を入れることもできますけれども、しゃべることは瞬間的なものですから、助詞も狂ってしまふし、ときには自分が言いたいことと反対のことを言ってしまう場合もあり得るわけです。しかし根本的には同じようなことじゃないかと私は思います。

林(四) ラガナさんは非常に特別な経験を持っていて、とにかく徹底的に書くということをやった。恐ら

く普通の日本語習得者は反対だろうと思うんですよ。

普通の外国人にとって
は

林(四) 村崎さんにおうかがいしたいんですが、ラガナさん

のような優秀な学生じゃなく、今普通の学生に日本語を教えておられて、学生が非常に難しがることを、具体的な例で幾つか出していただけませんか。

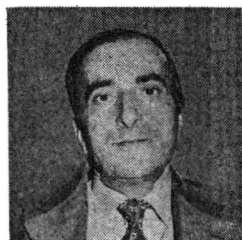
村崎 ラガナさんの場合は、まさに完全なところに達するということに基準を置いて日本語を習得なさった。すごくレベルの高い時点では確かにお話のとおりだと思ふんです。書ければもちろん読めなければならぬし、しゃべれなければならぬ。完全に書ければ、全部できるわけです。でも私は、日本語の非常に基礎的な部分では、聞いてしゃべることができて、書けないという状態は十分あり得ると思います。日常会話は大体それで済むような気がします。ただ、その上の段階にいくと、やはり書く・読むという操作ができないことには絶対に上に達せませんから、最初から読み書きも含めて、聞いたり話したり、四つの機能を同時にずっとやっていかなければいけないと思ひます。

林(四) 読み書きをということは、漢字を使って日本人のように普通の日本語の読み書きをやらせるのです。

村崎 そうです。普通の日本人と同じような読み書きをするということです。

林(四) ローマ字なんかでやるのはよろしくない……。

村崎 そうだと思います。ある一定のレベル以上の日本語を習得し、理解するためには、普通の日本語の漢字仮名



ドメニコ・ラガナ氏

交じり文でちゃんと読めて、それを認識して、それでしゃべったりすることができるようにならなければだめだと思います。

林(四) 読み書きでも、話し聞くでもいいんですが、具体事例でどの学生もひっきり、つまり

村崎 それはたくさんあるんですけども、まず発音の方からいきますと、聞いたり発音したりするという面では、日本語は比較的易しい言語だと思います。というのは、大体区別しているディステインクティブな音が少ないですね。母音は五つだし、子音は十八くらいですから。次に、音節構造が非常に簡単ですね。大体開音節で、CVです。(注 Cは子音、Vは母音) CVCというのは、特殊な促音節と撥音節とそれだけしかない。

日本語の音声の特色

鈴木 たしかフランス語の母音は十六くらい。もちろん鼻にかかる鼻母音も入れてですけれども。英語もドイツ語も十七、八あるんじゃないかな。

村崎 朝鮮語は、数え方によって違いますけれども、母音が入らないし九つです。子音が同じような数え方をして

二十。ところがアイヌ語は非常に少なく、母音は日本語と同じく五つです。子音はたったの十なんです。

アイヌ語は文字を持たないから、文字から習うだけというところは絶対できないわけです。ただ耳から習うだけだけれども、本当にアイヌ語はすぐ簡単にしゃべれるようになったのです。朝鮮語は、六カ月韓国にいたことがあるんですけども、聞けるようになるまでものすごく時間がかったんです。聞けるようになったら、しゃべれるんですけども、読み書きは全然できない。でも日常の会話は聞けるし、話せる。

林(四) 読み書きというのは、ハングルによるものですね。

村崎 それは全然やってないから、できないんです。

鈴木 日本で朝鮮語が読めて、新聞とか雑誌が理解できる人でも全然話せない、書けないという人はたくさんいるんでしょう。

村崎 いるでしょうね。

鈴木 朝鮮語は日本語の場合と違って、音声の規則が山ほどあって、書いてあるものが別の音になる。その規則が複雑だから、読んで分かる人でも、初めて聞いたらよく分からない。

ラガナさんはその点日本語にぶつかられた。日本語は、殊に仮名の場合には書いてあれば読めるし、漢字は何と読む

かは別ですが、これも仮名を振れば読める。

英語の場合を考えてみますと、もし独学で発音は全然習わないで、スペリングだけで習ったとすると、非常に不思議な発音を自分で考えてしまうわけですね。例えば発音しない音をみんな読むと、初めてイギリスやアメリカに行くと、違った言語じゃないかと思うだろうという気がするんです。だから独学とおっしゃたけれども、どういうふうに発音するかは、テーブを聞くとか、あるいは、何か記述を知らんになるとかなさったわけでしょう。

ラガナ いや、そんなことはありませんでした。

鈴木 そうしたら、なおさら日本語だからできたんですね。英語の場合は、例えば、*eye* をこの場合発音するとか、しないとかということをもし勉強しなければ、いざ発音してみると、全然イギリスで通じない。*eye* の発音は何通りもありますからね。

ラガナ おっしゃるとおりですね。実際、私は中国語を習おうと思ってましたけど、発音も非常に難しいし、母音と子音それに四声も難しくて、やめてしまいました。日本語の場合は、母音も子音もほとんどイタリア語やスペイン語と同じですから、別に困難であるとは思いませんでした。

私の体験に即して言えば、中国語や朝鮮語などの場合は発音が複雑ですから、独学では非常に難しい。日本語の場合には別に難しくない。ただ、難しくないからといって、

正確に発音することは易しいというわけでもない。私はイントネーションやアクセントなどを無視していたので、正確に日本語を発音することは難しいですね。

林(大) イントネーションとかアクセントを正確に、ということとはよく言われるけれども、それは必ずしも正確につけなくても、日本人は了解してしまいます。だから日本語をしるのに必要なものということからいえば、イントネーションとかアクセントとかを無視してももう正確なものはできているということになるんじゃないですか。

林(四) その点は、不完全な悪い発音でもそれを聞いて母国語の人間がすぐ理解してしまうか、ちゃんと発音しないと受け付けないというふうな違いは言語ごとにあるんじゃないか。

鈴木 私はあると思います。似た音声をきいても、自分の梓にはまってこなければ、ちょっとずれてても分からない。私はそれは心理的な構造だと思うんですけど、日本人の場合は、外国の人が話すとき、ああではないか、こういうつもりじゃないかと勘ぐるというか、察しようとしませぬ。ところが、アメリカの人もそうですし、ドイツの人もそうですが、我々が間違っただけの場合、顔色とか状況でそういうたはすはないという察しがつかない人が多くいる。だから失礼なことだと思って本気で怒ったり、不愉快になる。我々は、外国の人がそんな変なことを言うはずが

ないという訂正の方をきかせて、こちらで再解釈しようとする。これは他者依存の文化と自己中心の文化との違いかもしれないけれども……。日本人の外国旅行記なんかも記されていますが、外国でこちらが一言言うと、相手がムッとして、それきり向こうを向いちゃったということが、随分あるわけです。日本人は外人が変なことを言っても、それは間違ったからそう言ったんだろというふうに思いやってやるでしょう。それは言語の難しさじゃなくて、心が柔らかいか、あるいは自分の方が常にだめだと思っているか、(笑) そういうことが外へ出てくる、そういった心理的な問題だと思ふんですよ。

ですから、外国語で書いてあるものは正しいはずだという先入主があるから、外人の書いたもので分らないものがあつた場合、日本の人は、自分に語学力がないと思つてしまふ。向こうの人は、分らないと、書いた人が頭が悪いと考へる。つまり、基準が逆だと思ふ。そういう一般論はあるのではないかと思います。

さっき、ラガナさんが日本語は易しいとおっしゃつたのは、多分にラガナさんがスペイン語を母国語とされているために、割合日本語とウマが合つた、相性がよかつたという点が一つあるように私は感じますけれども、その点どうですか。逆に言うと、日本人もスペイン語は割合上手に話しているんじゃないやありませんか。

林(大) 日本人は、スペイン語は易しいと言いますね。鈴木 その点でラガナさんの母国語と我々の日本語はウマが合うわけですね。

ラガナ それはそうですね。

林(大) 日本語での子音とか母音とかで新しいものを学習されたことはないんでしょう。自分の持つていらしたもので組立てを変えさえすれば済むということがあつたんじゃないですか。

ラガナ そういうわけです。

村崎 音節の構造が似てますね。

林(大) 中国語の場合のように、新しい子音とか、舌の動かし方を特に学習する必要はなかった。

ラガナ 中国語が私にとって非常に難しかったのは、特に四声のためです。私は音痴ですからね。(笑)

村崎 日本語のアクセントは高低アクセントでしょう。

それが学生に分からない。こっちは高くしてアクセントをつけているのに、全然区別できないわけです。ストレスのアクセントだったらすぐ分かるのに、高低のアクセントは全然理解できない学生がいますね。

林(大) そういう人が日本人にもいるんですね。だから外国人だけを責めるわけにもいかない。(笑) 日本人自身がそんなことを言つたら、通じ合わなくなつてしまふ。

幾らラガナさんが音痴ですからとか、アクセントは正確でないとかおっしゃっても、そういう人間は日本人の中にくさんいるんです。

鈴木 簡単に言ってしまうと、日本語はアクセントは余り大事じゃないのではありませんか。我々は「箸」と「端」が違うとか、アクセントが三つあるとか、得々として言いますね。それはあるけれども、実話話しているときは、殊に複合語の場合とか、方言も考えますと、アクセントなしで全く平らに話しても、ほとんど一〇〇%近く分かるんじゃないですか。

村崎 ただ日本語の発音の面でも難しくて、しかも大事だと思ふのは、モーラ〔注 英 Hora 母音十子音というまとまり、あるいはそれと同等の長さを持つ単位で、日本語の場合、モーラは、仮名一字に相当する。(拗音は例外)〕の概念がよくあてはまる言語だということですね。アクセントをつけるにも、長い母音だったら、「オカアサン」の「カア」という二重の長い音節を、最初の部分のモーラだけ高くして、その次は下げるでしょう。そういうのがなかなかできない。だから、モーラ言語であるということ、日本人にとってはどうなのかわかりませんが、外国人にとっては非常に難しいことだと思います。

逆に、日本の子供は、モーラ言語として意識しているものですから、私の長男が今度中学校に入学して英語を習い

始めたんですけれども、大変なんです。国語教育ではローマ字を小学校四年生のときにやるようになっていてほしいんですけれども、うちの子供の学校では全然ローマ字を教えないから、よけい大変なんです。

まず日本語の「カ」をカと書くこと自体を認識するのに彼は非常に骨折る。「カ」というのを一つの言語単位として覚えているから、「カ」というのはそれ以上分析できっこないと思っている。ですから逆に日本人は早い時期に外国語を学ぶべきだと思いましたね。それをちゃんと認識しないことには、外国語を全然勉強できない。そのことがよくよくこのごろ分かるようになったんです。

林(大) 中国でも子供にローマ字を教えるのに、先生方が苦労しているんですよ。クのとアがあるからといってクを発音してからアを発音するようなことはしないように、「カ」と発音するんで「クア」と言っちゃいけないんだというようにことが指導参考書に書いてあります。

村崎 逆に日本語がモーラ言語であるということは、日本語独特というか、それが難しいかどうか知らないけれども、なかなか分かりにくいことのようにですね。

林(四) 日本語は発音の点でかなりきわだって違う言語だということになりますかね。

村崎 モーラ言語であるという点で私は違うと思います

けれども、あとの点では簡単なのではないのでしょうか。

林(大) 簡単だという点は注意されてよいでしょう。子音や母音の数が少ない。アイヌ語はもっと少ないわけでしょうけれども。

村崎 私にはほかの言語といっても、限られたものしか知りませんので、分かりませんけれども、日本語は子音の数とか母音の数は少ない方じゃないですか。

鈴木 母音の数は、五つないし六つ、アラビア語のように三つというのは例外でして、五つが特に少ないというより、五つの方が世界の言語としては普通らしいですね。

和田祐一さん(言語人類学者)が今度論文に、数字は出てないんですけども、世界の言語の母音は五つが大多数だということを書いています。私は全部調べたことはないんですけども、根拠があるんだと思います。しかし数からいくと、音韻が七十という言語がコーカサスの何とか語にあると言いますね。少ないのが二十くらい。アイヌ語は少ない方で、母音と子音で十五くらいでしょう。ですから日本語は普通というところかと思いますが。

林(大) 普通なんですかね。大体我々が一般に習おうとする言語は音韻の数が多いいですよ。

鈴木 いま林先生のおっしゃったことは大事なことで、日本人がごく最近まで持っていた先入観として、たまたま

西欧の英語、ドイツ語、フランス語が世界の言語の中では特殊であるのに、その特殊を標準だと思った。そのために、標準的な自分が特殊な位置を占めていると錯覚したんだというのが私の持論なんです。つまり、西欧の言語が特殊であって、日本人の言語は普通だと思わべきだったけれども、たまたま明治以後、国を挙げて勉強した英・独・仏語が特殊であって、それが価値の中心であったために、自らを周辺の位置に落としめるといふ錯覚に陥った。そういう考えは、いかがでしょう。

林(大) それは新たななる国粹主義だけだね。

鈴木 国粹というよりも、自分は美男でなくもないということを自覚した、そういうようなことですよ。

林(大) しかし音韻に関して、美男でないと思ったんだろうか、日本人は。

鈴木 音韻が少ないから、思想が区別できない。だからだめだというふうに決めつけてしまうということがあったんじゃないですか。

林(大) そういう考え方もあるでしょうね。しかし単純明快だと考えた人もいたんじゃないだろうか。

鈴木 単純明快だという人もいたけど、音韻が進歩してないから思想が複雑でないという議論の方が、私の調べた範囲では多いように思いましたね。

林(大) それでコミュニケーションがうまくいかないな

らば仕方がないけれども。

鈴木 今は音声の段階での話をしているわけですが、話を音声以上の段階に持っていくと、簡単だからだめだという議論がどれだけ多くあったか指摘できますよ。例えば、単数と複数の区別がないとか、名詞に女性、中性、男性がないとか、ドイツ語のように関係代名詞に性があり、格があると、かっちりした議論ができるとか、そういうのがある。それから語彙数が少ないという点についての指摘、柳田国男先生とかそうそうたる明治期以来の学者が日本語の語彙の乏しさを嘆かれています。

日本語の語彙の特色

林(四) 日本人は語彙数が少ないと感じているんじゃないか。

林(大) 柳田先生のはまた特別だと思えますよ。平生の自分の意思を発表することについて、標準語が普及したために、大事な物の言い方が乏しくなってしまった。

鈴木 例えば、「風」を表す本来の日本語は地方地方で何十とあったのに、そういうものがローラーをかけられたという意味ですね。もう一つは、柳田先生の時代、明治・大正の日本人が日本語の語彙が乏しいといったのは、ヨーロッパの概念を翻訳しようと思うと、手ごろな訳語がなかった。ないから足りないと思ったんじゃないか、日本の

言葉を向こうへ翻訳する努力を同時にした場合には、いかにヨーロッパの言葉は語彙が少ないかという逆の体験が起こって、お互い様だということで手を打ったんだと思うんです。

ところが、御承知のように明治以来今に至るまで、外国のよいものを輸入するという発想のみで日本語と外国語の決定的なつき合わせをするでしょう。そうすると、例えば、「アイデンティティ」(英: identity)と言おうと思うと、ないとか、「ゲゼルシャフト」(独: Gesellschaft)というとないか、「エスプリ」(仏: esprit)というとないかということになる。でも「わび」というのがフランス語にあるとか、「さび」はどうだとかということを同時にやれば、相打ちになったんじゃないか。

林(大) 相打ちだけれども、その必要度がちょっと違うのね。非常に文芸的な感性的な面においては、日本語の方が比較的豊富だと日本人自身も思う。けれども、日本が近代化するためには必要な概念が乏しかったということを感じたわけですね。

鈴木 それを劣等意識として強く感じたわけですね。ただ私に言わせると、それは徳川時代に必要がなかったから、言葉が造られなくて、明治以後、いざ必要となったら、日本人は全部日本語で——主に漢語ですけれども、造っちゃったわけですよ。ところが現在に至るも、自分の国の